

露伴全集

第四十卷



露伴全集

第四十卷

昭和三十三年四月五日印刷  
昭和三十三年四月十日發行

露伴全集第四十卷

頒價九百五十拾圓

複製本

著作權者

幸か

田だ

文あや

編纂

蝸くわ

牛ぎう

會くわい

發行者

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地  
岩波雄二郎

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五番地  
山田一雄

印刷所

東京都青梅市根ヶ布三八五番地  
精興社

發行所

株式會社

岩波書店

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地

電話(代表)九段(33)八四八六番  
振替口座東京二六二四〇番

# 目次

贈右府大久保公ヲ吊ス文	明治十二年	一
品行ハ身ヲ立ツルノ本	明治十一年	二
方陣秘説		三
幽玄洞雜筆		一七
賤機帶	明治二十二年一月	三九
風流問	明治二十二年	四一
戲評長唄文句新撰いろはがるた	明治二十三年一月	七一
旅天律	明治二十三年二月	七七
般若心經第二義注	明治二十三年八月	七九
筆のまに	明治二十三年十月	一〇四
葎蕪本目錄	明治二十四年四月	一一三

現存せる童話 明治二十六年六月

餘興 明治二十九年九月

當流人名辭書 明治三十三年七月

古今料理書解題 明治三十四年九月

狂言異同目錄

東西伊呂波短歌評釋 明治四十二年三月

## 笑話

解頤茶話 明治二十六年七月

春の山 明治三十三年一月

笑話 明治三十八年一月

笑話補遺 明治三十八年四月

水上語彙 明治三十年七月

文章講義 大正五年四月

海道下り

一一〇

一二四

一二五

一五二

一七一

一七五

一九一

一九四

二一九

二二五

二二七

二三一

若紫の卷の一節	三三三
古今和歌集序	三三九
千載和歌集序	三四六
白峰御陵	三五一
方丈記一節	三五四
海道記一節	三六六
徒然草一節	三六九
保元物語一節	三七一
山姥	三八七
一枚起請文	四〇三
與乗信房勸信心決定書	四〇六
念佛を勸むるの書	四〇八
雪に舊師紹巴を訪ふの記	四一〇
旅	四一四

世界の貸屋大將

四一六

人才を得るを論ず

四二二

俗樂を論ず

四二九

石野兄弟

四三五

淺茅が宿

四三七

## 評語

小説般若心經紹介文 明治二十三年八月

四四九

書簡紹介文 明治三十七年三月

四五〇

緒名が淵評 明治三十八年三月

四五五

雀踊評 明治三十八年六月

四五七

短篇小説選評 明治三十八年七月

四六四

馬琴日記鈔論評 明治四十四年二月

四六八

ブルターク英雄傳鼈頭評 大正十四年七月

四九五

イカーラ佛國革命史鼈頭評 大正十五年六月

五九四

祝辭 稟告 選評

解停の祝詞 明治二十二年十二月

六四一

博覽會出品人の友人各位に告ぐ 明治二十三年三月

六四一

自由新聞の發刊に就て 明治二十三年十月

六四三

新小説發行に際して世に告ぐるの文 明治二十九年七月

六四四

新小説編輯者として江湖諸君並に新作家に告ぐるの辭 明治二十九年十一月

六五四

日刊世界之日本祝辭 明治三十年一月

六七八

懸賞募集短篇小説一讀手扣拔萃抄 明治三十三年一月

六七八

高祖の降誕

六八二

審査選評 明治四十二年十月

六八四

戰捷第二次祝賀に際して 昭和十七年三月

六八五

回答

雅號由來記 明治三十年八月

六九一

名家涼感 明治三十四年七月

六九一



- 吾か好める人物 明治三十六年一月 六九一
- 自己私淑の偉人、遭逢の五傑 明治三十六年一月 六九三
- 名士撰擇の品性修養書 明治三十七年一月 六九三
- 當代名士の片影 明治三十八年八月 六九四
- 報徳記及びひ尊徳翁につきて 明治三十八年十二月 六九四
- 奮闘的青年座右之銘 明治三十九年一月 六九八
- 夏期學生の讀物 明治三十九年六月 六九八
- 現代名人格言筆蹟 明治四十年五月 六九八
- お伽噺に關する意見 明治四十年六月 六九九
- 回答 明治四十年七月 七〇〇
- 余は如何にして一日を送る乎 明治四十年十月 七〇〇
- 當代名士發憤の動機 明治四十一年一月 七〇三
- 現代諸名士は如何なる花を好むか 明治四十一年四月 七〇三
- 學生夏期最有益經過法 明治四十一年六月 七〇四

時間活用法 明治四十二年一月

七〇五

法然上人に對する感懷 明治四十二年四月

七〇六

雪月花に對する嗜好 明治四十二年五月

七〇六

細川忠興の妻 明治四十四年二月

七〇六

幼時の讀書 明治四十四年三月

七〇八

予にして若し婦人たらば如何なる職業の良人を選択すべきか 明治四十四年四月

七〇九

明治の聖代は何を以て記念し奉るべきか 大正元年九月

七一〇

貴下の恐しと感ぜらるゝもの三四及びその理由 大正三年一月

七一〇

舅姑別居の可否得失 大正五年五月

七一〇

雜誌といふもの 大正十年十月

七一〇

名士は如何なる酒と煙草を好むか 大正十三年十月

七一一

諸家の書齋觀 大正十五年九月

七一一

日本文學研究の動機 大正十五年十一月

七一一

正誤

當流人名辭書補遺 明治三十三年七月

出廬正誤 明治三十七年四月

賴朝正誤 明治四十一年九月

冬の日抄正誤 大正十四年二月

## 未定稿

無法 明治二十三年

一席詞話 明治二十三年

其初め 明治二十四年

消夏雜譚 明治二十八年七月

斷篇四章

日文そのほか

噤

露伴先生逸文

蝸牛庵隨筆

七一七

七二一

七二二

七二二

七二五

七二六

七二八

七三〇

七三二

七三五

七三九

七五八

七六二

讀書札記

酒  
昭和四年一月

衣 同 得 丈 十

七六六

七九三

八〇四

八〇六

八一三

八一四

八一五

後記

八一七

# 贈右府大久保公ヲ吊ス文

今ヤ日本國開化ニ趣ク駿ヒ乎トシテ止ム可カラズ蓋シ方今之ノ如キ景況トナル基礎ハ誰ニカアル西  
郷隆盛大久保利通等ノ盡力ニ因ル然レドモ彼ノ西郷ハ叛逆ヲ企テ空シク死シ獨リ大久保公ノミ勤勉怠  
ザルニ惜ム可シ來ル五月〔十〕四日賊徒ノ爲メニ殺害セラル之實ニ前世ノ因縁トハ云ナガラ國家ノ不幸  
之ニ過ギズ嗚呼ト歎息シテ止マズ 幸田成行

(明治十一年)

# 品行ハ身ヲ立ツルノ本

二

凡ソ四海ニ生ヲ稟ケタル者ハ大トナク小トナク皆我が爲ス可キ所ノ業アリ因テ萬物ノ靈ニ位スルニ何ゾ之ノ業ヲ爲サミルヲ得ンヤ若シ怠惰ニシテ是ノ業ヲ勤メザル者ハ實ニ人ト生レタル甲斐ナカラニ依テ此ノ業ヲ全セント欲セバ先ヅ品行ヲ正シウスルニアリ然ルトキハ隨テ勉強モ亦進ミ終ニ天下ニ赫タル名譽ヲ殘ス可シ

(明治十一年)

# 方陣秘説

## 概論

方陣ハ何ノ國ヲ問ハズ其ノ來ル事甚ダ久シ。蓋シ古代人民ノ少シク數學思想發達シタル時期ニ當リ偶然トシテ起リシ者ナル事疑ヲ容レズ。而シテ其ノ奇偶交錯シテ且ツ和數ノ常ニ等シキヨリ、蒙昧神怪ノ思想ニ富ミシ所ノ古代ノ癖トシテ、(人民開明ノ度ヲ分テ神怪ノ時代、想像ノ時代、實理ノ時代トスルハアウガスト、カントノ名論ナリ)之レニ附スルニ種々ノ臆説ヲ以テシタル事はレマタ疑フベカラザル者ナリトス。即チ支那ニ於テ洛書ト號シ天地ノ大道之レニ盡クトナス如キ笑ニ餘リアル妄説ハ、蓋シ彼土ノ聖人等ト尊稱スル禹ノ時代ニ偶然發生シテ、而モ禹之レニ驚嘆シテ大ニ喜ビ且ツ連山ノ根底トナリシカ若シクハ連山ヲ飾ルノ具トナセシニ相違ナシ。而シテ後世ノ數理思想ニ乏シクシテ想像ト神怪ノ感覺強キ湯、文武、周公、孔子ノ如キ者、相補ヒ相助ケテ歸藏ト變ジ易トナリ、孔子ニ至テ大成セリ。然ルニ尙ホ笑フベキハ其後ノ儒者道士ノ輩モ皆ナ此ノ迷想ヲ遺傳セル愚蒙ノ人ナレバ、少シモ實理ノ境界ニ足ヲ入ル、能ハズシテ千古ノ秘ヲ闡キ幽ヲ發シテ方陣ヲ敷衍スル事アタハザルノミナラズ、併セテ易ノ如キ愚書ヲモ増補スル事ナキノミナラズ、(楊雄ノ太玄經ヲ除ク)又タ讖テ此レヲ駁シテ妄談臆説ト斷言スル事モナサズ、悲夫々々。日本ノ如キハ應神以來支那ノ餘臭遺香ニ其ノ鯁神

經ヲ籠絡セラレテ、其間或ハ易ヲ論ジ理ヲ談ズルノ學者ナキニアラザレドモ未ダ實理ノ域ニ進マズ、  
實驗ノ尊ブベクシテ想像（單純）ハ半文錢ノ價值ナキ事ヲ知ラザルノ故ニ洛書ノ秘密ヲ知ラズ。阿部  
晴明、新井白蛾ノ如キハ今日マデハ其美名ヲ傳ヘタレドモ、今日ヨリハ兒童ノ笑柄トナリ玩弄物トナ  
リテ清水帶弘先生ト其ノ段格ヲ等フセントス。彼ノ印度モ亦タ然リ、但シ支那人ヨリハ勝リテ古代ハ  
世界第一ノ人民タリシ丈ケ、洛書ノ淺薄卑近ナルヲ超エテ其ノ古婆羅門ノ寺院ニ存セルト云フ者ハ  
稍々進歩シタリト雖ドモ、惜哉時世變遷シテ形勢一革、耆婆後ニ耆婆ナク釋迦後ニ釋迦ナク、徒ラニ  
是ヲ以テ病災ヲ攘ヒ未來ヲ知ルノ具トナス。西洋モ亦タ然リ、方陣ヲ名テマジック、スクウエアート  
ス。スクウエアーハ方ノ義ニシテ、マジックハ魔法ノ義ナリ、蓋シ羅旬語ヨリ來ル。（Magicus）然レ  
ドモ是レ語原ニアラズシテ、マヂカスナル語ハゼンド語ノマヂヨリ來リシ事疑ヲ容レズ。而シテゼン  
ド語ハサンスクリット語ト殆ント近キ者ナル故、或ハ印度ヨリ流傳セシヤモ計ルベカラズ。而シテ其  
ノ病疾災難等ヲ除クト云フ事モ亦タ同ジトス。噫、古代人民ノ神怪ヲ好ム事何ゾ甚ダシキヤ。然リト  
雖ドモ活眼ヲ開テ觀ズレバ、怪ヲ好ムハ想像ノ母ニシテ想像ハ實理ノ母ナル事天地ノ妙作用ニシテ、  
人ニ怪ヲ好ミ神ヲ喜ブノ情アルハ理ヲ明メ實ヲ知ルノ根タリ源タルニ相違ナク、予又タ何ゾ尤メンヤ。  
然リト雖ヘドモ今ヤ時積リ月重リテ人類アルヨリ既ニ六千餘歲ナリ、神怪ノ時代ハ去リ想像ノ時代モ  
終リヲ告テ、二十世紀ノ新天地ニ入ラントスル世界ノ氣運ニ當リナガラ、尙ホ依然トシテ東洋ノ腐敗  
空氣ノ中ニ呻吟シテ、神怪ト想像ノ念慮ノミヲ運用シテ徒ラニ玄ヲ語リ理ヲ談ジ傲然トシテ得意ナル  
人多クアルハ、憫ムベク歎ズベシ。噫、余ハ神怪ヲ好ミ想像ヲ喜ブ事ヲ責メズ、唯ヒ之レニ甘ンジテ



其步ヲ進メズ百尺竿頭一躍ノ勇氣ナキヲ責メザルアタハズ。今此ノ方陣ノ事素ヨリ取ルニモ足ラザル一一小奇巧ノ術タルニ過ギザレドモ、是ヨリシテ人或ハ一隻眼ヲ開テ新知識ト新學說ヲ得ルニ至ラバ、余ノ満足喜悅スベキノ事ト感ズルヤ小少ニアラズシテ、讀者ノ利益モ亦タ少ナカラザルベシ。(洛書ヲ取ルニ足ラズトスル丈ニテモ)

### 説明第一

四	九	二
三	五	七
八	一	六

		一		
	四		二	
七		五		三
	八		六	
		九		

上ニ掲グルハ古來ヨリ人ノ知ル所ナリ。即チ三鉛直線、三水平線、二對角線トモ合數十五トナル也。此ノ單白ナル淺薄ナル方陣ハ即チ支那日本印度羅馬ノ古代人民及今人(一部分)ヲ籠絡セシ者ナリ。古代人民ノ腦髓ノ弱クシテ此ノ數ノ當嵌ノ因テ來ル事ヲ知ラズ、禹ヲ聖人トシ孔子ヲ聖人トスルモ彼等ハ皆ナ腦髓薄弱ニシテ吾人ト異ナル事ナク、否古代ノ人民タルニ負カズシテ此ノ組織方法ノ所以ヲシラズ。今バツチェット氏ノ法ニヨリテ説明セバ、實ニ易ミタル者ニシテ讀者モ驚嘆スベシ。蓋シバツチェット氏ノ方ハ善美ヲ盡シタル者ニハアラザレドモ、最モ分り易キヲ以テ第一著ニ讀者ノ腦中ニ藏スルヲ必要トス。但シ奇數オッドノ方根ルートニノミ用ユ。

圖ノ朱(註。點線ヲ以テ代フ)圈内ニ一ヨリ九マデ(根數三)ヲ置配シ